

戦前の神戸経済

大恐慌前後

鈴木商店の破産

第一次大戦後のいわゆる戦後恐慌から、昭和のはじめにかけて、わが国経済はどす黒い暗雲にとざされていた。戦後恐慌は大正九年にはじまった。諸物価は暴落し、銀行の取付けや企業の倒産はあとをたたなかった。ストライキも長期化し、大規模化した。なかでも、川崎造船所のストライキは象徴的であった。大正十二年の関東大震災および十四年の北但地方の震災は、それに拍車を加えた。陰うつな昭和のはじまりが重苦るしく予感されていた。この時期を資本主義の一般的危機のはじまりと解するものがあるが、たしかにそんな感じのする時期であった。

昭和期のはじめの日本経済、とくに神戸経済の動揺を語るさい、忘れてならないものに、鈴木商店の破産がある。鈴木商店は、もともと台湾における砂糖、樟腦などを取扱っていた。しかし、大戦中の好況期にそ

を融通するためにコール資金を借りた。コール資金の返済期日がくると台銀は日本銀行に融資を仰いだ。

こうして悪循環が続いた。この台銀と鈴木とのくされ縁はついに国会においても追及されることとなり、台銀の整理は、必然的なものとなった。当時鈴木商店の債務総額は四億五千万円、うち三億五千万円は台銀からであったから、鈴木商店への新規貸出しの中止は、鈴木商店への致命的な打撃となった。それと同時に、台銀も曲折をへてついに休業に追いこまれる。同時に当時関西における大銀行であった近江銀行も休業し、銀行に対する取付けは全国的にはげしくなった。これよりさき、鈴木系の六十五銀行（市内）も休業した。いわゆる金融恐慌の爆発となった。

戦前、戦後を通じて、神戸市内の一企業の行動が、日本経済全体に、これほど大きな影響を与えたことはない。もし、鈴木商店の倒産がなかったら、その後の神戸経済の歩みにどんな違いが生じていたであろうかを、思わずにはいられない。

（神戸市史より）

原稿募集

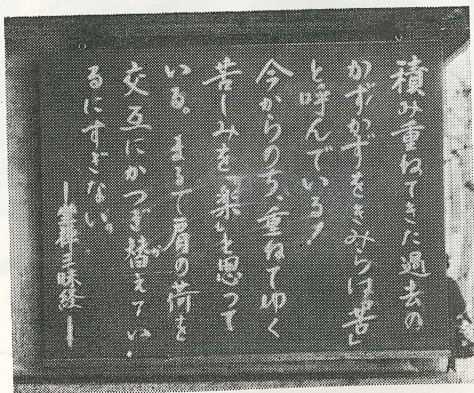
内容 随想、和歌、俳句、絵画、写真
鈴木時代の思出の記等
原稿用紙四百字詰五枚程度

締切り 昭和四十五年五月末

送り先 六五〇 神戸市生田区三宮町一丁目三神ビル五階

大陽鉱工株式会社分室

『たつみ』編集部宛



関東大震災と

東京支店 名古屋支店

網干 尚 明

それは丁度手の隙いたものから狭い食堂へ現われては屋敷をとっていった時だった。グラグラときた、家がゆれた、椅子が揺れた、「地震だッ」

皆は驚いて茶碗や箸を置いて表へ飛び出した。表の通りはやっと荷馬車を通れるかと思われる程の狭い道路だった。私は驚きもせず（いや実は驚いて腰を抜かしていたのかも知れぬが）箸も茶碗も置かなかった。驚いて表へ飛び出しても屋根瓦が落ちて怪我するのは家の中も同様だから（と考えた訳ではなかったが）動かなかった。

時は大正十二年九月一日、所は御園町の狭い通り、民家の二階建を事務所に使っていた名古屋支店、と云えば当時を思い起される方々も多きいられるであろう。支店長は高橋半助氏、支配人代理に鍋島伝蔵氏、既に私は物忘れする歳だから大方のお名前は忘れてるが、私のいた石炭部に山下慶一、岩橋貞良氏、後に藤

波幸一氏、人絹に藤原長司氏、小林悟録氏、棉花に伏見俊助氏、計理は後にニューヨークに行かれた藤岡一郎氏、同氏と結婚された飯田はな子氏、近松嘉吉氏とは名古屋時代か小樽時代か思い出せない。

当時私は日曜日毎に名古屋城下の乗馬倶楽部へ馬乗りに通っていたので、翌二日は確か日曜日だったのだろう、乗馬倶楽部へ行ってかえり、乗馬ズボンに長靴、烏打帽子にムチ一本と云う身軽な服装で、独身者はお店へ食事に立寄った。と、お店の重だった人々が、日曜日だと云うのに出勤されて支店長を中心に、皆沈痛な面もちでヒソヒソ何か話していた。私は何事だろうとは思ったが別に下ッ端まで関わりのあることではあるまいと、別段気にもとめずに昼食をしていたら、重臣会議から「二寸来い」と呼びにこられた。でも未だ何事とは知らずに顔を出すと、支店長だったか「オオお前丁度好い

格好をしている、丁度いい丁度いい」と云われて、それから昨日の地震で関東一帯が破壊され、通信機関が全部杜絶えたので、東京支店の様子が皆目判らない、支店長は窪田駒吉さんであったと思う、一番近い名古屋から至急様子を見に連れ、と本店から連絡があったので、その前後策の会議であった。私にはそのまま急ぎ東京へ行って支店の様子を連絡せよ、尚支店の人達を適当な方法で、とりあえず「名古屋まで脱出させるよう手配せよ」と云う命令だった。直ちに警察署の旅行証明書や、リュクサックに食糧を入れたもの等が手配され、私はそれを持って、とにかく行ける処まで行く、と云うつもりで名古屋駅を後にした。

汽車は静岡県の江尻駅で止まってそれから先へはいつのことか判らないと云うことだったので、私は箱根越えを覚悟したが、人の噂さで清水から船が出ると云う話を聞いたので、清水の製油工場へ行って様子を聞き、関釜連絡船が廻航して横浜港へ向うことを確かめ、直ちにこれに便乗、翌日横浜港へ着いたが、横浜港は勿論棧橋もなくなっており、壊れた防波堤へ舳で上がって、これも車体だけになった電車で横浜駅へ、

何処まで行くのか判らないまま来合せた省線で川崎あたりまで運ばれ、あとは足に任かせて、どうにか東京へ入り、白木屋あたりを見当に兜町へ向った。東京支店は、あの河へ半分程傾いていたように思う。誰も人影はなく大井の寮が連絡場所になっていることを張り紙で知り、再び引返して大井へ向った。ようやく寮にたどりつき、誰と誰に逢ったのか今は記憶にないが、数人と共に信越線で篠ノ井駅へ下車、駅前の旅館数室を借りて小憩して貰い、更に名古屋駅前支那旅館へと送る手配をした。名古屋支店へはとりあえず電話で報告、私は再び三度東京、篠ノ井を往復し、それから名古屋へと次々と人を送った。

途中の各駅では焚出しや、衣類など町の婦人会の人達がつかけて、罹災者を労わって呉れたが、慰問が重なると共に罹災者達も馴れて食傷気味で、だんだん贅沢になって今度は煙草がほしいの、酒がほしいのと云い出すようにさえたっていた。そんな目まぐるしい数日が過ぎて、人々もようやく落付きを取り戻していった。私は一ヶ月程して支店長室に呼ばれ、「この度は御苦労だった。これはお家さんからだ」と、金一封

関西ペイント新社長

小谷憲孝氏訪問の記

木畑 龍 治 郎

を頂いた。それは金五十円、当時としては莫大な賞で、私はその使い途に困った。早速名古屋新聞社へ行って、その中二十円を関東震災見舞金として寄附、残る三十円で松坂屋で洋服を買った。どうもその当時から私は、スタイルリストだったらしい。その帽子は東京空襲で家や家財と共に焼けて、国民服一着の着のみ着のままとなった。余談だが、東京空襲の時は日本橋の呉服橋に住居があったが、この時も町会の警防団に籍があったばかりに、町会の人や見知らぬ人達、通行人や怪我人を高島屋の地下へ担ぎ込んだり、医者に手伝って学校の医務室へ薬を探がしに行ったり、自分の家の焼けたのも後になって知ったり、テンヤ、ワンヤだったことを思いだす。今四十七年余も昔のことを思い起し、更に今尚ほ元気で活躍して居られる当時の方々の消息を、たつみ会報で知る事が出来るなど、細々ながら余生を送りつつある身を仕合せに思う。

(旧鈴木商店
名古屋支店石炭部長)

「きょうの人」

「老齡年金をもらっているくらいだから若くありませんよ。社内協力を得てがんばりますがね」

小柄で顔も小さく白髪の小谷さん、ひかえ目にしゃべりだすあたり、みるからに「好々爺」である。ただ、新社長として経営の進め方に話がおよぶと、やる気じゅうぶんのかまへ。

「成長する経済の状況に即応した経営をしていかねばなりません、なによりも多く売ることです。そして、利益をあげるためには、各部門が責任を持つ利益管理制度を積極的に推進していきます。決算期だけではなく、毎月ごとの勝負ですよ」

塗料業界は競争が激しく市況の低落では同社の九ヶ月決算も大幅減益になっただけに、責任は重い。その点「商売上手」なのでうってつけといえる。大正十一年に名古屋市立貿易語学校を出て商社マンをめざし鈴木商店に入り、そこが倒産して昭和三年に関西ペイントに入社したが、現在までほとんど営業畑を歩いてき

十一月十七日午前十時、大阪市東区伏見町の関西ペイント本社に新社長小谷憲孝氏を訪問する。先般、在阪五社の大新聞其の他の報道で会員諸子にも既に御承知の事と思うが、此の度、我等の会員小谷憲孝氏は業界のトップメーカー、シエア第一の関西ペイント株式会社の社長として会社の興望と祝福の裡に就任せられたのである。高畑会長は一早くこのビッグニュースに大きな喜びと感動を持たれ、早速辰巳会としての祝意を伝え度いと発意せられた。偶々、私の舊仇で憎さも憎い畏友橋本(旧姓植野)賀一郎君が小谷氏の親戚に

当り、小谷氏の幹旋で鈴木商店に入社したという親しい間柄なので、同君を煩わし関本社の秘書課を通じて面接を申込んだ処快く御了承、上記の日時を指定された。其の日の朝になって同行予定の柳田義一氏に急用が出来たので止むなく橋本君と二人でお伺いした。

劈頭、型通り乍ら御祝の言葉を申し述べると、既に先日高畑、永井の御二方より懇篤なる祝辞を頂いて居り乍らまだ御返事も申し上げずに失礼して居たと、いともねんごろに且恐縮げに申された。橋本君とは「憲さん」「賀一ちゃん」と呼び合う程の近しさで、お互同志の家も近く、小学校も一緒という、親戚でも特に親しい仲なので、しばらくは故郷の山や河を中心に懐旧談がはずむ。

鈴木商店へは私等より一年早い大正六年の入店で間もなく名古屋支店勤務を命ぜられ、それからつと終店時まで名古屋に在職されたと云う。その後、昭和三年に関西に入社、今日まで実に四十幾年只管にわき目も振らず歩み続けて来られたとの事であった。道すがらの詳しい御話は聞くよしもなかったが一生の大半を関西と共にあり、その興隆に心

た小谷さんでもある。

「わたしの信条は「誠意」ですがこれはセールスマンにとりたいていなことです。これさえあれば厚かましい売り込みでも、結局はお客さんにかわいがってもらえるものです」

昨年、社内の抵抗を押しきって年功序列制度から能力本位の人事管理へきりかえをおこなったのも小谷さんが推進したもの。また「本を読むというより買うのが趣味」と笑うが、毎年の新入社員には「マージャンもいけど本を読め」といつているし、きびしい一面をのぞかせる。

ゴルフが好きで「腕前のほうは万年ビギナーですが、足を鍛えているので、歩くのは若い人に負けないつもりです」と元氣なところをみせている。六十七才の新社長ながら、同社をになう意欲は年輪を感じさせない。宝塚市中州二丁目九番十九号の自宅では八重夫人と二人暮らし、三男三女は、それぞれ独立、結婚しているが、正月の二日には孫の八人もいっしょに集まるのが恒例。文字通り「好々爺」になるわけである。

(四四・一一・一一産経記事)

楓さん(顯光院誓山禪英居士)

の人間像を偲ぶ

澤村 亮一

今年の八月六日は早くも十三回忌に相当するそうで六甲の祥龍寺にてその法要を営むとの御遺族のお知らせを頂いた。生憎、その日は拠ない差支えがあるので盟友の今村頼吉さんと二日の辰巳会の幹事例会にて落ち逢う機会を以って御宅へ参詣することになった。

予定通りお伺いが出来て、さて呼鈴を押したが一向に応答がない、不審に思つて裏口のガレージの方に廻ると、暫くして黒っぽいレース編みの身軽な洋装姿の未亡人が外出先から帰って来られた。今春、賀状にて梅若六郎師地頭の「融」の優雅な舞姿の絵葉書を賜っていたので記憶も新しく余りにも和洋装の鮮やかな変貌に目を瞠った。来訪の挨拶を申し上げると、折悪しく仏間の畳替えの最中で取り散らかして居るので失礼するとの事で取りあえず立ち話し、トピックは早くも十三年以前の懐古談に移る。当時肝臓障害の重態であ

魂を打ち込まれたであらう事が今日の大成を見るに至った事は容易に想像される事である。関は元々岩井商店と密接な関係にあったが、はしなくも今回の大合同に端を発し、改めて日商岩井の系列に加つた事は、氏の言によれば「矢張り目に見えぬ深い絆の働き」であったのだろう。感慨深くも西川社長との交流や、取引事項等を語られた。鈴木商店時代の思い出に話が遡及すると、氏の口から高橋半助、藤原長司、伏見俊助、楠田一二、田原保三郎、丸本道憲氏等の名前が出て仲々話の結末がつきそうもない。

私等は辰巳会の経過や現況をかいつまんで説明し、この次の例会や全国大会に是非御参会下さる様懇請申し上げた。只、辰巳会には出席率が悪いので顔なじみが少く、次なる時には是非皆さんに紹介して呉れる様との御希望なので丁度此の際、この欄を借りてその一端を兼ねさせて頂く事とする。

十一時半辞去、小雨そぼ降る晩秋の街はそぞろ襟元にうそ寒さを感じられたが、此の辺り名にし負う船場のビジネス・センター、兩名共心拭かれた様な清々しさを抱いて、しばし歩むともなく歩を運んだ。

ったにも拘らず須臾も会社の事が念頭より離れず、文字通り身命を賭して奉仕の生涯を尽したと目頭を赤くして切々たる惻隱の哀調にこちらもついホロリとさせられた。左様ならの別辞に先立って、故人の霊を慰むる供養の爲めに何か憶い出の一端でもとの御要請をうけた。

さて、故人が在世中の歩みや功績等は既に日商四十年史に審にされ、又直接事業にタッチされた方々が沢山居られるのでその方へお譲りするとして私は専らプライベートの人間像のコボレ話を取り上げて稿を進める事とする。

楓さんのふるさととは土佐の中村で金物商の間屋を営み、高知に支店を設けて義兄常之助さんが担当されて居た。次兄の隆二郎さんと私は同窓の誼みがあり、日本樟腦の役員を勤められたが病没された。楓さんの兄弟は揃ってスポーツマンで頭脳は明哲、囲碁、麻雀等勝負事はズバ抜け